

病虫害の発生概況

〔病害発生概況〕

1. 稲・麦

早期水稲では葉いもちが鹿児島・熊本地区、佐賀で多～やや多発生、穂いもちは佐賀の一部で多発生した。紋枯病は熊本で多発生、縞葉枯病は宮崎・鹿児島で、黄萎病は鹿児島でそれぞれやや多発生した。普通期水稲では好天に恵まれ葉いもち・穂いもちともに少発生であった。紋枯病は、8月の多日照・低湿度で進展が抑圧され、各県とも平年並の発生にとどまった。白葉枯病は、佐賀で6月末～7月はじめの冠水と8月下旬の台風13号の影響で多発生した。心枯線虫病は近年少発傾向であったが、大分で多発生、馬鹿苗病は長崎・熊本で多発生、福岡でやや多発生した。ともに種子消毒の徹底が望まれる。

もみ枯細菌病は熊本で多発生、福岡・佐賀・大分でやや多発生した。9月第2半旬以降の出穂品種で発生が多く、この時期の秋雨前線の影響が大きい。縞葉枯病は大分を除く全県で多発生した。各県とも発生地域の拡大が顕著である。暖地向きのR S V 抵抗性品種がない現在はヒメトピウカカ防除指導の一層の徹底が必要である。萎縮病は近年減少傾向であるが、依然として広域に発生が続いている。黄萎病は沖縄・八重山で散発的な発生、褐穂黄化病は沖縄・西表島の一部で多発生、長崎・鹿児島で微発生であった。黄萎病は、鹿児島では平年並の発生であったが増加傾向にある。

麦類では赤かび病が5、6月の天候不順により急進展し福岡・佐賀・長崎・熊本・大分でやや多～多発生したが、全般的には小麦で被害が多かった。薬剤防除の実施が望まれる。小麦赤さび病は大分で多発生、小麦黄さび病は福岡・大分でやや多～多発生、大麦小さび病は大分でやや多発生した。うどんこ病は全般的には少発生であったが、鹿児島で平年並～やや多発生であった。

斑葉病は大分で二条大麦に多発生、福岡・佐賀・宮崎で平年並の発生、大麦網斑病が鹿児島で平年並～やや多発生、黒穂病は鹿児島で平年並の発生であった。これらの発生は種子の消毒と更新の不十分によるもので、防除指導が望まれる。大麦萎縮病は佐賀・大分で多発生したが他は少発生であった。大麦黄化萎縮病および小麦黄萎病の新発生が長崎・福岡で確認されたが、アブラムシ媒介の両病については、今後の発生動向に注意が必要である。

2. 転作物

ゲイズ紫斑病は長崎で平年並の発生・他は少発生、さび病は佐賀・長崎・熊本で少発生、葉焼病は佐賀・長崎・鹿児島で平年並の発生・他は少発生、べと病は長崎・大分・宮崎・鹿児島で平年並の発生・他は少発生、立枯

性病害は全般的に少発生であった。モザイク病(SMV)は大分で多発生し、県北部で発生が目立ったが、アブラムシ類の発生は平年並であった。

3. 野菜・畑作物

トマト・ナス・キュウリ・イチゴの灰色かび病は全般的に多発生した。特に施設栽培が多かった。イプロジオン剤・チオファネートメチル剤の効力低下がみられ、耐性菌の出現頻度が高くなっている。うどんこ病、菌核病はおおむね平年並～少発生であった。青枯病はナス・トマト・ピーマンともに平年並の発生であったが、福岡のナスでは連作によって生育後期に被害が目立つところもあった。ナス縮疫病は梅雨期の多雨のため福岡(露地)で多発生した。すずかび病は福岡(施設)で平年並～やや多発生し、薬剤耐性菌の出現がみられている。トマト疫病は全般的に平年並～やや少発生、葉かび病は大分で多発生の他は平年並の発生であった。宮崎で根腐萎凋病が多～やや多発生、鹿児島で萎凋症J₃が一部でやや多発生した。ピーマンモザイク病(TMV-P)は大分・宮崎・鹿児島・沖縄で多～やや多発生し、CMVも増加している。斑点病は1月、大隈地区でやや多発生したが他では少発生であった。

キュウリべと病は全般的に平年並～やや多発生であった。うどんこ病は佐賀(半促成)で多発生・大分でやや多発生、斑点細菌病は佐賀(抑制)、大分・鹿児島(施設)で多～やや多発生した。炭そ病はおおむね少発生であったが、大分で多発生した。スイカつる枯病は鹿児島で多発生・福岡やや多発生・他は平年並の発生であったが、ベノミル剤・チオファネートメチル剤の効力低下がみられ、耐性菌の出現が多くなっている。沖縄(露地)で灰白色斑紋病とモザイク病(WMV)がやや多発生した。メロンつる枯病は鹿児島で多発生、熊本の秋冬作でやや多発生した。うどんこ病は熊本の秋冬作でやや多発生・熊本春夏作・長崎・鹿児島とも平年並の発生であった。長崎で斑点細菌病が平年並～やや多発生した。カボチャうどんこ病は宮崎(夏秋作)・鹿児島秋どりでやや多発生、べと病・白斑病・褐斑細菌病は鹿児島秋どりで多～やや多発生した。モザイク病(WMV)は宮崎・鹿児島秋どりでやや多発生、沖縄では一部地域で多発生した。トウガンにTSWVが沖縄でやや多発生した。イチゴ炭そ病は福岡で、菌核病は長崎で、萎黄病は福岡・長崎でそれぞれ平年並の発生であった。

キャベツべと病は宮崎でやや多発生、根こぶ病は大分の連作圃場で多発生した。ハクサイ軟腐病は熊本(夏作)・大分(秋冬作)でやや多発生、大分では黒斑病・べと病・根くびれ病ともに多発生・モザイク病やや多発生であった。ダイコン軟腐病は熊本夏作で、萎黄病は宮崎で

それぞれやや多発生した。ニンジン黒葉枯病は大分で多発生・長崎で平年並～やや少発生、ゴボウ根腐病は大分の連作地で多発生した。

タマネギボトリチス葉枯症は5月の降水量が多かったため佐賀で多発生、白色疫病・萎黄病は大分で多発生した。ネギ黒斑病が大分の秋冬作で多発生、鹿児島で疫病・さび病がやや多発生した。レタスモザイク病は長崎で平年並～やや多発生、灰色かび病は福岡・長崎で、菌核病・べと病は福岡でそれぞれ平年並の発生であった。ショウガ根茎腐敗病は長崎で平年並の発生であったが、連作地では汚染が進んでいる。鹿児島でエンドウうどんこ病、ソラマメさび病・モザイク病ともに多発生、菌核病、インゲンかさ枯病がやや多発生した。

ジャガイモでは、長崎で青枯病がやや多発生、そうか病は冬春作で平年並の発生、秋作でやや少発生、黒あざ病は平年並の発生であった。疫病は長崎の冬春作で平年並の発生、秋作で少発生、熊本・宮崎・鹿児島でも少発生であった。葉巻病は長崎でやや多発生であった。サツマイモ紫紋羽病は鹿児島・宮崎で少発生、带状粗皮症は鹿児島・宮崎・大分の早掘りで発生が目立ち、つる割病・かいよう病は宮崎・大分、立枯病は宮崎、黒斑病は大分・長崎で、それぞれ少発生であった。終息とみられたてんぐ菓病は沖縄北部と宮古で少発生があり、今後の発生推移に注意が必要である。サトイモ汚斑病は鹿児島・宮崎・大分で平年並～少発生、斑点細菌病は鹿児島で、モザイク病は宮崎・大分でそれぞれ平年並の発生、乾腐病は沖縄で少発生した。

4. 果 樹

カンキツかいよう病は前年の台風13号襲来後の発病が増加し、越冬菌量が多かったため福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・鹿児島で多発生した。黒点病は梅雨明けの遅延で佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎でやや多発生、そうか病は4～5月の低温、梅雨の影響で佐賀・熊本・大分でやや多発生した。灰色かび病は全般的に平年並の発生であった。褐色腐敗病は熊本で、赤衣病は鹿児島の早生温州幼木園で、白かび病は沖縄でそれぞれやや多発生した。ピワがん腫病は長崎で展葉期の降雨のため平年並～やや多発生、灰斑病は鹿児島でやや多発生した。赤衣病は、離島の若木園で発生し漸増傾向にある。パインアップル萎凋病は古株園の一部で多発生したが、全般的には平年並～やや少発生、心腐病は新植園で一部やや多発生した。

ナシ黒星病は長梅雨のため福岡・佐賀・大分で多発生、長崎・熊本でやや多発生した。黒斑病は長崎で、うどんこ病は熊本でやや多発生、輪紋病は大分で平年並～やや多発生した。ブドウ黒とう病は福岡・佐賀で多発生、大分でやや多発生した。べと病は佐賀で多発生、福岡・大分でやや多発生した。晩腐病は大分で、褐斑病は福岡・大分で、うどんこ病は熊本でそれぞれやや多発生した。枝ぶくれ病は大分の巨峰品種で多発傾向にある。カキ炭

そ病は福岡で、角斑落葉病は熊本でやや多発生した。モモせん孔細菌病・黒星病は福岡で、縮葉病は福岡・熊本でやや多発生した。キウイフルーツ果実軟腐症は梅雨期の連続降雨のため福岡で多発生した。クリ実炭そ病は熊本・大分で、斑点病は大分でやや多発生した。

5. 茶 樹

チャ炭そ病は、長崎で2番茶採後の連続降雨でやや多発生したが、全般的には各県とも平年並の発生であった。網もち病・もち病は各県ともに少発生、輪斑病は鹿児島でやや多発生した他は少発生であった。赤焼病は鹿児島・南薩を中心に3月に多発生した。鹿児島で萎縮症状が「ゆたかみどり」に発生した。

6. 特用作物

サトウキビ黒穂病は鹿児島・熊本地区で多発生、沖縄では全般的には平年並の発生であるが株出し圃場で多発生した。葉枯病は沖縄で一部品種に多発生、さび病は沖縄・宮古ではやや多発生、モザイク病は沖縄で平年並の発生であった。タバコ黄斑えそ病(PVY-T)の発生が鹿児島・長崎・熊本・大分で増加し、問題になっている。ジャガイモウイルス検疫のより一層の強化が望まれる。イグサ紋枯病は福岡の常発地を中心に平年並の発生であった。

〔害虫発生概況〕

1. 水稲・麦

長距離移動性害虫のセジロウカは6月17日を飛来の始まりとして、7月末まで数波のまとまった飛来波がみられ、近年になく、長期間にわたり、かつ飛来量も多かった。そのため、大分・宮崎を除き各県多発した。沖縄本島では8月5半旬、9月4～5半旬に台風による飛来がみられた。トビイロウカは福岡・佐賀・長崎・熊本などは並～多で、7月の飛来が多かった。大分・宮崎・鹿児島は飛来量は少なかった。各県の発生は熊本の並を除けば、他はいずれも少で、本年発生が少なかった原因として、飛来量の少なかったこと、飛来時期の遅れを除けば、9月中旬以降の低温と防除の徹底をあげている。沖縄本島では8月5半旬、二期作水稲に台風による飛来があった。ヒメトビウカは佐賀・長崎・宮崎のやや多を除けば、他はいずれも並または少であった。

コブノメイガは宮崎のやや少を除けば、佐賀・鹿児島(普通)多、福岡並～やや多、長崎・熊本・大分やや多であった。このように各県を通じ発生が多かったのは、飛来量が多かったこと、飛来波が多く防除適期の不明、あるいは、防除の不徹底をあげている。

イネミズゾウムシ

九州全体として昨年の2倍に分布は拡大している。福岡では6月上旬移植の普通稲、長崎では対馬に、熊本・大分などでは中山間部の早植稲、宮崎では沿海部から内陸の普通稲へ分布を広げている。しかし、各県ともにその被害は軽いとしている。佐賀では手植地帯で、熊本で

は箱施用の普及の遅れている所で今後問題が出そうである。

スクミリンゴガイ

各県いずれも分布は拡大している。しかし、被害はそれほど増加していない。その原因として、福岡では貝の流入時期が7月第2半旬で遅かったこと、佐賀では浸冠水がなかったこと、長崎・熊本では捕獲努力をあげてい

る。沖縄では本島・八重山ともに被害は認めていない。

その他、福岡・宮崎で局部的にクモヘリカメムシが、鹿児島ではミナミアオカメムシが目立った。宮崎県北部山間地にフトオビコヤガが局部的に多発した。

麦では、福岡でムギダニが小麦4haに4月中旬多発。鹿児島では小麦・大麦に4月以降アブラムシが多発した。

昭和61年 稲主要病害虫の発生並びに防除面積

(単位:ha)

病害虫名	福 岡		佐 賀		長 崎		熊 本		大 分		宮 崎		鹿 児 島		沖 縄	
	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積	発生面積	防除面積
(病 害)																
葉いもち	21,061	49,310	4,563	30,000	5,000	18,000	7,800	53,000	17,440	46,000	7,858	28,559	11,902	39,789	35	330
穂枝いもち	23,038	83,601	3,912	79,800	1,700	25,000	9,500	45,000	22,400	49,000	9,559	39,436	11,053	38,477	12	196
紋 枯 病	37,781	81,141	12,560	59,850	13,000	35,000	24,000	90,000	30,360	43,000	28,258	34,724	31,545	43,411	53	157
白葉枯病	1,461	7,168	5,306	3,500	50	100	1,600	8,000	1,001	7,000	508	6,175	6	30	31	13
もみ枯細菌病	28,796	17,701	28,382	0	3,000	1,500	28,000	800	7,500	5,000	1,612	1,700	10,079	3,872	0	0
縞葉枯病	5,916	0	9,219	0	6,672	0	4,500	0	1,010	0	7,152	0	26,481	0	3	0
萎 縮 病	1,139	0	1,901	0	5,000	0	6,400	0	4,580	0	6,533	0	9,052	0	0	0
黄 萎 病	0	0	0.1	0	100	0	3	0	0	0	0	0	4,821	0	0	0
ごま葉枯病	12,095	18,900	3,800	0	3,100	0	300	5,000	10,200	0	5,153	0	17,788	195	81	130
小粒菌核病	20	0	0	0	1,000	2,000	120	0	1,300	0	0	0	0	0	0	0
心枯線虫病	10	47,900	5	3,000	1,550	0	450	2,400	11,100	500	1,934	7,597	9,172	15,580	0	0
(虫 害)																
ニカメイチュウ 第1世代	5	5	0	0	0	0	10	—	600	15,500	0	0	—	—	0	0
ニカメイチュウ 第2世代	5	5	0	0	0	0	12	—	450	14,500	0	0	—	—	0	0
セジロウンカ	57,715	141,821	26,288	59,850	19,000	75,000	32,000	57,000	22,750	36,000	30,900	32,624	34,939	53,148	477	1,379
トビロウンカ	41,420	145,521	24,683	59,850	10,000	75,000	21,000	58,000	9,750	55,000	9,433	36,084	14,725	65,054	257	1,379
ヒメトビウンカ	48,462	145,051	9,829	59,850	8,000	80,000	9,200	54,000	2,000	40,000	26,981	44,804	10,146	32,876	19	1,379
ツマグロヨコバイ	50,751	145,051	31,614	59,850	16,000	25,000	21,000	91,000	12,100	40,000	30,900	44,804	28,150	24,405	388	796
イネツトムシ	2,662	51,120	200	99,750	1,000	1,000	400	3,000	6,600	1,000	1,473	4,164	1,075	20	5	6
コブノメイガ	50,866	82,810	31,918	99,750	13,000	33,000	19,000	53,200	31,850	65,000	15,193	17,861	5,203	240	143	370
フトオビコヤガ	69	—	0	0	50	0	300	—	1,500	300	2,498	4,170	1,072	30	—	—
アワヨトウ	570	—	50	0	0	0	800	0	55	—	1,057	1,000	99	—	1	1
イネゾウムシ	6,264	1,680	2,500	0	3,000	500	7,800	100	9,000	7,500	8,058	7,451	2,415	950	35	0
イネミズウムシ	216	452	1,202	1,600	1,960	2,000	850	1,200	79	3,550	8,335	2,038	1,542	330	200	139
その他 カメムシ類	1,512	30,592	658	0	8,500	16,000	3,200	4,200	5,500	15,600	8,524	34,702	1,319	7,546	161	568
総 得 付 面積 (291,427)	61,000		39,900		22,500		61,100		36,852		30,900		38,402		773	

注) 宮崎・鹿児島は早期・普通期の、沖縄は一期・二期作の合計を示す。

2. 転作作物

大豆にハスモンヨトウが福岡では9月上旬やや多発、熊本でも9月中旬からやや多発、大分では8月下旬以降、宮崎でも県西部8月下旬、県中部9月中旬から、鹿児島では大隅および中央地区南部で9月に多発した。大分ではさらにヒメコガネ、ドウガネブイブイ、アカビロウドコガネの誘殺も多かった。

3. 野菜・畑作物

ミナミキイロアザミウマを含め、スリップスの被害が一般化しているが、佐賀では施設・露地を含めナスで多、鹿児島ではナスでやや多、大分では夏秋トマトで多、キュウリでは佐賀・大分で多、スイカでは鹿児島でミナミキイロ多、メロンでも鹿児島でミナミキイロやや多、ネギ、タマネギは大分でネギアザミウマ多としている。

コナガは薬剤感受性の低下が各地ともに問題であるが

キャベツでは長崎やや多、大分・宮崎多となっている。ハクサイでは熊本で並～やや多、ダイコンが並～多となっている。

ハスモンヨトウは大分ではハクサイ、ナスで、鹿児島ではサトイモに福岡・佐賀では施設イチゴで、特に薬剤感受性の低下が問題となっている。また水田転換大豆からの侵入も問題である。

シロイチモジヨトウは大分・鹿児島のネギで問題となっている。

本来九州には分布しないとされてきた、キタネグサレセンチュウの被害を長崎ではニンジン、大分・宮崎ではダイコンで確認し、熊本ではゴボウでもみられている。この場合、前作は畜産農家に貸して牧草が作られていたが、このことが原因とみられる。

沖縄県ではトマトサビダニが新しく発見され、長崎県

対馬ではカボチャミバエを検出した。スイカ・イチゴのナミハダニのケルセンの効力低下も問題となっている。

ナタネでは鹿児島県北薩でナモグリバエが、サツマイモでは大分県でナカジロシタバ、ヒメコガネ、ドウガネが宮崎県でもナカジロシタバが一部地域に目立った。

サトウキビでは鹿児島県熊本地区でカンシャコバネナガカメムシが、沖縄でも第1世代幼虫が本島中南部、宮古地区で、第2世代は同じ地区の前年夏植えに局部的に多発した。鹿児島県馬毛島ではトノサマバッタの記録的な大発生がみられた。アオドウガネは発生は並であったが、本島北部の離島、南部の乾燥地帯、宮古地区の一部で6～8月の長期干魃が被害を助長した。トノサマバッタも南大東島の一部で長期干魃が被害を助長した。本島北部のローズグラスの一部でトノサマバッタの群生相の発生がみられた。

4. 果樹・茶樹

カンキツのミカンハダニは佐賀・鹿児島を除き少発生。カメムシ類も佐賀・長崎を除き少発生で、アブラムシ、ミカンハモグリガが新梢で発生が多かった。チャノキイロアザミウマは誘殺は多かったが被害は少なかった。ゴマダラカミキリは多発年であった。ヤノネカイガラムシ

は佐賀・熊本で増加傾向にある。

ナシのハダニ類は佐賀多、福岡・長崎でやや多、他はやや少の発生であった。福岡ではマツモトコナカイガラの発生が一部に目立った。

モモではモモハモグリガが福岡・大分がやや多、他は並の発生。

ブドウは佐賀・大分でスリップス類多、長崎やや多で他は並の発生であった。

カキのカメムシ類は佐賀がやや多、他は並以下、スリップス類はカキクダアザミウマは佐賀が多、福岡やや多、チャノキイロアザミウマは福岡県がやや多、他は並以下の発生。

キュウイはクワシロカイガラが大分・福岡で目立った。

クリはカツラマルカイガラが熊本・宮崎で多、クリタマバチは恒常的発生である。

茶ではチャノコカクモンハマキは大分が多、佐賀がやや多、他は並以下。チャノホソガは佐賀が多、熊本が並～やや多、他は並以下の発生、スリップス類は大分が多、佐賀・宮崎がやや多、熊本が並～やや多、他は並以下の発生であった。

(九州農業試験場環境第一部)